

## ハイデルベルク信仰問答講解説教24「恵みは人を造り上げる」(2012年2月12日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

わたしたちは皆、汚れた者となり／正しい業もすべて汚れた着物のようになった。わたしたちは皆、枯れ葉のようになり／わたしたちの悪は風のように／わたしたちを運び去った。あなたの御名を呼ぶ者はなくなり／奮い立ってあなたにすがろうとする者もない。あなたはわたしたちから御顔を隠し／わたしたちの悪のゆえに、力を奪われた。しかし、主よ、あなたは我らの父。わたしたちは粘土、あなたは陶工／わたしたちは皆、あなたの御手の業。どうか主が、激しく怒られることなく／いつまでも悪に心を留められることなく／あなたの民であるわたしたちすべてに／目を留めてくださるように。(イザヤ64:5-8)

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていないが、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。わたしにつながっていない。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないと、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないと、実を結ぶことができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。(ヨハネ15:1-5)

## 【説教】

16世紀の宗教改革によって生み出されたプロテスタント教会を別名、福音主義教会と言う場合があります。教会が「福音主義」であるためには、絶えずキリストの十字架と復活による罪の赦し、新しい命を信じる信仰によって救われることを福音として語り続けなければなりません。そして語るだけではいけません。その福音に絶えず生かされ、支えられている群れでなければならない。そこにその教会が福音主義であるか否か、本物のプロテスタント教会であるか否かがかかっています。しかし口だけ福音主義というものがあることをご存知でしょうか。口ではプロテスタント教会を名乗りながらも、内実は全然、福音主義ではない教会が実はたくさんあります。ともすると福音主義ではなく誘惑は、わたしたちのすぐ近くにあるかもしれません。

プロテスタント教会が、宗教改革の戦いの中で、掲げたことの中に「信仰義認」があります。一言で言えば、行いではなく、信仰によって救われるということです。その信仰も神さまから与えられなければわたしたちの内に起こらないわけですから、結局、すべては神さまの恵みということです。これを「恩寵のみ」(*sola gratia*)と言います。わたしたちが救われるのは、自分の中にある何かではなく、すべて神さまによるということです。ここが分かっているようでいて分かっていない。頭では理解しているつもりでも、その恵みに生かされていないのです。

どうもわたしたちには全部を恵みとして受け取るだけでは不十分のように考える「たち」があります。そんな都合のよい話はないのであって、何らかの行い、業が必要ではないか。それは、無意識の内にもやはりどこかでまだ自分に期待している。自分で完璧を目指したい。あるいは自分で信仰を確かめたい。救いを確かめたい。そういう思いが働くからではないでしょうか。すべてを恵みに委ねきってしまうことができないのです。

そういうわたしたちの心をそのまま代弁しているような問答が今日のところです。問62-64までを読みました。ここを続けてお読みになると、わたしたちの内面、心の動きをよく表していることに気がきます。問62、ここには自分の善い行いを認めてほしいという思いが見え隠れしています。おそらくこの問答は、自信を持って善い行いに励む人を想定しています。それは当時のローマカトリック教会であり、また現代の口だけ福音主義にも通じるかもしれません。

その人は自信にあふれています。今日も善い行いができた。夜、一日を振り返り、満足して、安心して床に就く。そういう人でしょう。出来る人というのは、そういう出来る自分を少しも認めてもらいたいものです。だから言うのです。「わたし

ちの善い行いは、神の御前で義またはその一部にすらなることができないのですか」ほんの一部でもいい。今日の自分の行いを認めてほしい。そうすれば安心できるのです。でも考えてください。それは信仰でしょうか。ヘブライ人への手紙に「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」(11:1)とあります。目に見えない、しかし確かにあること、それを確信するから信仰なのです。行いに生きるといふことは、結局、目に見える行い、働きでしか信仰ははかれぬ、確かめられないということなのではないでしょうか。それは信仰ではないのです。行いをする自分を信じているだけのことです。

ですから、信仰問答は自分の行いを認めてほしいという思いを、何のためらいもなく一蹴します。「この世におけるわたしたちの最善の行いですら、ことごとく不完全であり、罪に汚れている」この言葉に衝撃を受ける人は少なくありません。そこまで言わなくても、少しはわたしの業も役に立っているのでは。しかしこの信仰問答では、既に前のところで同じような言葉を語っています。問8「それでは、どのような善に対しても全く無能であらゆる悪に傾いているというほどに、わたしたちは墮落しているのですか。そうです。」

それは、わたしたちには救いに関してほんの僅かな可能性すら持たないことを明らかにしています。信仰問答はそこに徹底するのです。そこに立たなければ神さまの救いは恵みにならないからです。わたしたちは自分に可能性がなくなって初めて恵みに気付くということがあります。「先日、ある病床の方を訪ねました。もう自分には何も出来ない。教会にも来られない。聖書も読めない。でも不思議と御言葉が頭に浮かんでくる。何か自分で聖書を読んでいた時よりも、近くに御言葉を感じるというのです。この告白は真実だと思います。」

わたしたちは自分で何でもできる時は、そこには自分しかないのです。でも失って初めて気付く。こんなに近くに神さまがおられる。ヤコブは言います。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」それはヤコブが兄エサウから追いつめられ、逃れていた時でありました。順調なときは、ヤコブは神さまを知らない。でもその危機の中で、彼は神さまを近くに感じました。信仰に苦難は必要だということを以前申しましたが、存在の危機の中でこそ気付くものなのかもしれません。

そういう意味で、信仰はまず自分自身が打ち砕かれなければなりません。そこからでなければ始まらない。「自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」(マルコ8:3

4)とあります。これも出来た。あれも出来た。だから信じるのではない。そういう自分が打ち砕かれてこそ主に従うことの恵み、喜びが見えてくるのです。出来る時はいいでしょう。でもそういう自分で支えられている信仰だと、出来なくなった時に逆に神さまを恨み、捨てようになります。

しかし、それでもこの問答は食い下がっています。問63、この報いについては、マタイ5：12があがっていますが、これは山上の説教の幸いの教えのところ。「喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある」この人はどうしても信仰の報いを自分の行い、功績によるものと考えたいようです。少しでもその値打ちを認めてほしいのです。それはこの世の価値観でいけばそうでしょう。報酬はそれなりの働きがあって、それに対して支払われるものだからです。だから神さまの救いもそうだと考える。しかしそうすると、あるいはそのような可能性を少しでも残してしまうと、救いは恵みではなくなる。行いではかるものになるでしょう。それがよく現れるのが、わたしたちが人を裁くときです。自分が行いに生きているか否かがよく分かるのは、人のことを見て裁くときです。あの人はしていない。あれでは救われないうらう。まるで神さまに代わって自分がそれをはかっていることがあります。その時に思い出してほしい。ああ、今自分は恵みから離れているということ。信仰においては、報いもまた恵みなのです。この恵みに徹すること、これはどんなに徹しても過ぎることはありません。そうでないと、途端にわたしたちは恵みを忘れ、自分の行いで救いをはかるような、そして人を裁くような傲慢なことになってしまいうのです。

ルカによる福音書第18章9節以下を読みます。救われたのは後の人！行いに生きているとこの御言葉が感謝にならない。つまずきになるのです。でもわたしはここで皆がつまずく必要がある。いやわたしたちがつまずくためにこそ御言葉がある。例えば、主イエスが天の国について譬え話を語った。王が王子の婚宴を催した。ところが招いていた者がそれに来ようとしない。そこで招いていない者たち、町の通りに出て見かけた者はだれでも、善人も悪人も連れてきて婚宴を開いたこと。主イエスはそのとおりにしました。ザアカイの家に言って、徴税人マタイの家に言って、食事をした。それががまんできなかったのが律法主義者、ファリサイ派の人々です。あの人は罪人と一緒に食事をした。そこでつまずく。でもこのつまずきを通らなければ、わたしたちは神の国がどういうところなのか。神さまの救いがどういふものなのか、分からないでしょう。そこでわたしたちは打ち砕かれる必要があります。

時に、教会の不誠実さ、無気力さ、臆病さを嘆くことがあります。いらだつのです。今日は神学校のために祈りをあわせませんが、神学校では必ず伝道実習、インターンがあります。ある学生が伝道に燃えてある教会に派遣された。ところがその教会は彼が期待したようなところではない。様々な人間関係の問題、やる気のなさ、古い習慣に固執すること、彼が思い描いていたようなものではまったくなかった。それで彼は幻滅し、その愚痴を教授にもらした。するとその教授はこう言ったのです。「でも一番ショックなのは、主イエスがこのような人たちが先に神の国に入ると言われたことだね。君はそのことをどう思う？」

何より主イエスの弟子たちがまったく理想とした信仰者ではないことです。裏切りがあり、権力争いがあり、疑いがある。にもかかわらず、その弟子たちに主イエスは神の国の鍵を授けます。やがて戻ってこられるときまで、御自分の務めと権威をこの破れを抱えた教会に託していかれた。どうしてだか分かりますか。それは彼らが相応しくないからです。相応しくない者が相応しい。それは教会が恵みだからです。

さて、この問答で想定している人は、なかなか頭の回転がいい人です。ここで良い質問をします。問64を見ましょう。そんな恵み、恵みなどと言っていると、何もしないでつけあがる人、甘える人が出てくるのではないですか。無分別で放縱な人々

が教会にはびこるのではないか。行いに生きる人は、この恵みという言葉に過敏に反応します。それでは教会は前進しない。成長しないと考えるのです。でもそのような心配はいらないと信仰問答は言います。答えを読みます。「キリストに接ぎ木された人々が、感謝の実を結ばないことなど、ありえない」結ばないはずがない。だから心配はいらないというのです。

「感謝の実」というのは、わたしたちの聖化された生活です。それこそ善い行いをすることです。でもここでの善い行いはその出所が違います。自分の中からはなく、「キリストに接ぎ木された」とあるように、肝心なのはキリストなのです。キリストから出る善い業、行いにわたしたちは生きるようになると言っているのです。そのために恵みによってわたしたちは相応しくないにもかかわらず、相応しいものとされた。キリストに結ばれ、その命をいただきました。相応しくないわたしの中にキリストの命が満ちあふれるのです。相応しいと思っていれば、自分が邪魔をして、キリストの御業を生きたことはできません。自分が打ち砕かれるからこそ、このわたしの中にキリストが満ちるのです。それはパウロが述べているとおりで。わたしは弱い時にこそ強いと。

以前も説教の中で触れたと思いますが、善い行いがどういふものかをよく示す話があります。アメリカでまだ奴隷制度があった時代。奴隷市場で人が売り買われていました。ある一人の少女が売りに出された。そこへある老紳士が来て、この少女を買いました。少女はこれから先、自分は一体この人にどれほど働かされ苦しめられるのかと思うと気が遠くなる思いでした。するとこの老紳士は少女に「あなたはもう自由だ。自分の国に帰りなさい」ああ良かったと少女は自分の国に帰ったか。違うのです。その少女は自分から願って、その老紳士のところで一生懸命働きました。そしてこの老紳士を最後まで世話したということ。

わたしたちも同じです。キリストによって、罪の支配から買い取られた。それはまったくの恵みです。この恵みにどう応えるのか。あとは自由奔放に暮らすということではない。この恵みに応える感謝の生活に進んで当然なのです。強いられてではなく、自発的に行うことができる。恵みはそのように人を動かします。強いられて、叱咤されて、動き出すではありません。そこに喜びはないのです。ただ神さまの恵みだけがわたしたちを突き動かすのです。

ヨハネによる福音書、ぶどうの木の譬えを読みました。5節を読みましょう。わたしたちはキリストに結ばれている。そのよみがえりの命を生きています。実を結ばないはずがありません。感謝の実はず実ります。どんなに相応しくない姿に見えても、何もできなくなっても、もうわたしたちの中にはキリストが住まわれている。この相応しくない者を御自身の栄光のためにお用いくださるのです。だから心配する必要はありません。いらだつたり、嘆く必要もないのです。わたしたちはただ恵みによればよいのです。祈りをささげます。